

三河乳がんクリニック  
薬剤部長

## 佐々木 俊則先生

神戸薬科大学薬学部を2002年に卒業し、名古屋大学医学部附属病院薬剤部研修生を経て、社会医療法人財団新和会八千代病院に入職。2009年に三河乳がんクリニックに入職し、同薬剤部長兼事務企画室室長に就任。年2～3回の学会発表を継続的に行うなど、研究活動にも注力。



# 医療人としての意識を持ち、広い視野と知識で 付加価値を提供できる薬剤師へ。

付加価値を提供できることが

薬剤師として生き残れる条件に

調剤業務の自動化が進み、さらにAIの進展、調剤技師の日本版導入の検討も進む中、薬剤師はどうあるべきか、薬剤師が果たすべきミッションについて改めて真剣に考えるべき時期が来ていると言えます。

私はこの先、薬剤師が生き残っていくためには、従来業務にとどまらず、いかに付加価値を提供できるかがポイントになると考えています。薬物療法のガイドラインに沿って医薬品を適切に使用できることや、副作用に適切に対処できることは、薬剤師として当たり前のこと。多くの文献や自身の臨床研究、あるいは患者さんの状況に基づいて、ガイドラインやマニ

薬剤師が果たすべきミッションとは何か、真剣に考えるべき時代が来ています。「薬のプロフェッショナル」であると同時に「医療人である」という意識を持ち、臨床で得られたクリニカルエッセンスを研究へとつなげ、より良い治療や医療の確立に貢献して欲しいと思います。

アルのさらに先を読み、他職種と協力して個々の患者さんにカスタマイズした医療を提供していくことが大切です。

もちろん、最初からその域に到達することは困難です。私自身、前職の病院勤務時代には「先生に出会えて良かった」と言いながら亡くなった患者さんを前に、無力感に打ちひしがれた経験もあります。少しでも、いやできるだけ多くの患者さんを助けたい、治療を楽にできるようにしたいとの思いから自己研鑽を積んできました。当クリニックに入職してからは、乳がん領域での第一人者を目指し、臨床で得られたクリニカルエッセンスを研究につなげ、年に2～3回の学会発表を継続的に発行得られた情報を患者さんへ還元しています。

「置かれた場所で全力を尽くし  
大輪の花を咲かせてほしい

私が薬学生の皆さんに贈りたい言葉に、「置かれた場所で咲く」というものがあります。仮に希望した職場や業務でなかったとしても、自分が「置

かれた場所」で、薬剤師として医療人として何ができるのか、ここで遂行すべきミッションは何かと考えてみてください。きっと、あなたができることはたくさんあるはずです。できることに「つつづつ全力で取り組み続けていれば、きっといつか大輪の花を咲かせることができる」と私は信じています。

それと同時に、いい仕事をするには「いい準備」が必要です。井の中の蛙とならず、大海を知り、より大きな世界へと漕ぎ出してほしい。文献を読むだけでなく、学会や地域薬剤師会、様々な講演会や交流会などに積極的に出かけて、いろいろな人と出会い、謙虚に教わることで、自分の世界を広げてほしいと思います。

「薬のプロフェッショナル」であると同時に「医療人である」という意識を持ち、患者さんの生活をより良いものにするために、自らで考えて自ら行動してほしい。いいアイデアも持っている人は大勢いますが、いいと思ったアイデアを実行できる勇氣、やる気、根気のある人は少ないです。そうして、自分の付加価値（武器）を磨いてほしいと心から願っております。